

平成 20 年度沖永賞選考経過及び授賞理由

平成 20 年度の沖永賞の選考経過及び結果をご報告いたします。

昨年 10 月に、沖永賞の候補となる図書・論文の推薦方を、労働関係の学者・研究者を中心とする 75 名の推薦人に依頼いたしました。推薦対象としたのは、平成 18 年 10 月から 20 年 9 月の間に出版、発表された図書、論文です。

平成 21 年 1 月 30 日に、当財団の審査委員会を開催し、推薦された図書・論文について、慎重に審査いたしました。その結果、次の図書 3 点を、平成 20 年度の沖永賞授賞作と決定いたしました。

(授賞図書)

- 1 ^{たかぎともよ}高木朋代 著「高年齢者雇用のマネジメント」
- 2 ^{はやまひろし}葉山 滉 著「フランスの経済エリートカードル階層の雇用システム」
- 3 ^{にむらかずお}二村一夫 著「労働は神聖なり、結合は勢力なり－高野房太郎とその時代」

なお、論文については、本年度は「該当なし」となりました。

次に、授賞理由を説明いたします。

先ず、^{たかぎともよ}高木朋代 氏の「高年齢者雇用のマネジメント」についてです。

本書は、企業において、高年齢労働者が定年 60 歳を超えて雇用されるには、どのような能力、キャリアが必要なのかということを探求した研究論文の集大成であります。

営利を追求する企業サイドの立場からみると、一律に 60 歳以降も労働者を継続雇用していくには難しい問題があります。そこで著者は、雇用継続を実現し得た高年齢労働者とそうでない者との能力、キャリアを比較することによって、雇用を継続されるには何が必要なのかを見出そうとします。こう

して、同じ企業に雇用を継続できた者や転職に成功して雇用を継続した者について、入社時までさかのぼってその能力、キャリアを詳細に調べた結果、同一職能内に長く留まるキャリアを歩み、なおかつその中で関連性の強い職種間において、比較的多くのジョブ・ローテーションを繰り返し、特定職能に関する様々な経験を積んでいるという、共通した特徴を見出しています。したがって、高年齢者雇用を拡大していくためには、入社から定年にいたる長期的視点に立った人的資源管理が必要になると、著者は結論付けています。

わが国は今、高齢化社会を迎えて高年齢者雇用の拡大が喫緊の課題になっており、既に高年齢者雇用安定法により 60 歳以降雇用継続が企業に義務付けられています。そうした中で、本書は、高年齢労働者の能力、キャリアが十分に発揮される雇用のあり方について、大変示唆の多い知見を示し、あわせて高年齢者雇用政策に対して重要な政策的素材を提供しています。また、本書の研究においては、質の高い、多くのインタビューが実施され、それをもとに入社時から定年までのキャリア蓄積の分析が行われております。それに費やされた労力は並大抵のものではないことが推察されます。

このように本書は、高年齢者雇用に関する質の高い著作でありますので、冲永賞授賞を決定したものです。

次に、^{は やま ひろし}葉山 滉 氏の「フランスの経済エリート—カードル階層の雇用システム」についてです。

本書は、フランスの企業における管理職、専門職、すなわちホワイトカラー上層部であるカードルを研究したものです。フランスのカードルは、1930年代におけるエンジニアを中心とする社会運動に端を発し、第二次大戦後の政府レベルでの制度化の進展、さらに高度成長期における多くのマネジメント系専門家の登場によって、一つの社会階層として確立してきたものです。

本書は、製造業から第三次産業にわたる主要企業におけるカードルの採用、賃金、労働時間、キャリア形成、企業定着性等について実施した調査結果を詳細に紹介するとともに、カードルの労働時間制度についてオブリ第 2 法に至るまでの変遷と現状、大手企業カードルへの女性の進出、カードル年金制度の実情、さらに、カードルの養成機関としての役割を担っているグランドゼコールの実態をそれぞれ紹介し、フランスのカードルについてあらゆる角度からその実像を明らかにしています。

カードルの担っている上級ホワイトカラー層は、世界各国の企業で増加していて、人事管理や労働法上の重要性が高まりつつありますが、一方で、それに関する研究はそれほど多くなされていない状況にあります。そうした中で、本書は、フランスのカードルという先進的事例に関する研究であり、時宜に適した、示唆の富んだ研究書だといえます。また、製造業から第三次産業までのフランス主要企業に丹念な聞き取り調査が行われており、深く掘り下げられた研究となっていることも高く評価されます。以上のような評価のもとに、沖永賞授賞を決定した次第です。

最後に、^に ^{むら} ^{かず} ^お 二 村 一 夫 氏の「労働は神聖なり、結合は勢力なり—高野房太郎とその時代」についてです。

本書は、日本における近代的労働組合の生みの親、生協運動の先駆者となった高野房太郎の生涯を歴史的な資料に基づいて描いたものです。

本書によれば、高野房太郎は明治元年長崎県に生まれ、幼少の頃一家で東京に移住し、その後、伯父の店の住み込み店員となって横浜に移り住み、そこから明治 19 年にアメリカサンフランシスコに向けて渡航しています。アメリカでは、労働運動に対する関心に目覚めるとともに、アメリカ労働総同盟のゴンバース会長との交流等を通して、労働組合運動に対する基本的な考え方を形成することになります。高野房太郎は明治 29 年に帰国し、職工義友会の再建とそれに続く労働組合期成会の設立、さらに日本最初の近代的労働組合である鉄工組合の結成に中心的に係り、日本での労働組合運動の実践を始めています。しかし、その後の労働組合運動の衰退とともに、明治 33 年に運動から離脱することになり、明治 37 年 3 月中国青島にて享年 37 歳で死去しています。

本書は、高野房太郎に関する当時の資料を国内だけでなくアメリカにまで足を伸ばしてくまなく収集し、それらの膨大な資料に基づいて房太郎の生涯を読みやすい形で生き生きと描いています。そして、日本における労働組合運動及び生協運動の先駆者は通説的には片山潜と理解されてきましたが、本書は、収集した豊富な資料に基づいて、実はそうではなく、高野房太郎が先駆者であるということを実証しています。これらの点から、労働運動史における貴重な研究であると高く評価し、沖永賞授賞を決定いたしました。

以上、簡単ですが、選考経過と授賞理由のご報告とさせていただきます。

授賞されました三人の方に心よりお慶びを申し上げ、今後益々のご活躍を期待しております。